

「フィールド」と「聴衆」とのスペクトラムの中で

The Juxtaposition between the Field and Audience

山田 亨
YAMADA Toru

I. はじめに

私がフィールドワークの場所として博士課程の大学院生だった時から現在まで一番長い期間お世話になっているのは長崎県の五島列島であり、その中でも現在は五島市という行政区画になっている地域である。このように切り出すと、「海外フィールドにおける地域調査のTips」という本論集のコンセプトからは、「山田は場違い」と思われるかもしれないが、本稿では五島での調査に至る以前の私自身の期間に焦点を当てることにより「海外フィールドにおける地域調査のTips」を論じたい。

というのも、私の場合、最初に五島に足を運ぶ以前にハワイの大学院に所属しており、逆輸入的にフィールドワークのために日本に来て、その後、中国本土での約1年半の生活を経た後に、アメリカに戻り学位を取得した。そして、その後もアメリカの教育・研究機関での業務に携わった後に、日本に戻ってきた。そのため、フィールドワークは日本で行ったのではあったが、専門用語をはじめ学術的な概念やフレームワークの訓練をアメリカで受けたため、この時の経験が本論集の多くの執筆者にとっての「海外調査」の経験と共通する点といえる。より具体的には、日本とアメリカでの経験から、「フィールド」と私による研究発表の聞き手となる「聴衆」との関係を幅の広いスペクトラムとしてより意識することになった。このことが、フィールドワーク中の悩みだけでなく、現在取り組んでいる教育・研究・そして社会還元業務のすべての基礎になっている。

II. 長期滞在にまつわる悩み

私は、筑波大学の修士課程（旧地域研究研究科）を修了し、同大学院の生命環境科学研究科の旧地球環境科学専攻の博士課程後期で1年間半地理学を学んだ後に筑波大学の休学しながら、ハワイ大学大学院の人類学研究科の博士課程に正規大学院生として所属することになった。つまり日本の大学院の所属を残してハワイの大学院にいる身であり、学部時代や修士課程から海外の大学の所属一本で、退路がないような状況で腹をくくって留学する大学院生ではなかった。むしろ、ハワイ大学へは日本に帰国することも可能性に入れたような、長期的なフィールドワークを

するための現地での所属の確保という側面もあった。

実際に、ハワイで出会った日本からの留学生には、フィールドワークのために現地の大学院に所属していた人も多くいた。これには複数の理由があり、中でも代表的な2つの理由として挙げられるのは、まず、海外で長期的なフィールドワークを行う場合、その調査目的と期間に適したビザが必要になること、そして、そのビザも調査を行うための助成金やその運用方法に適合する必要があるからであった。特に一般的に1年間もしくはそれ以上の期間の現地調査をすることになる人類学の場合、ビザと資金の問題は切実である。日本のパスポート保有者の場合、カナダやペルーのように観光ビザで連続6か月間まで滞在できる国もあれば、東南アジアのように観光ビザが切れる前に隣国に短期間出国し、そして、調査地に再入国することでビザの滞在期間をリセットして長期フィールドワークを行うことができる地域もある。それに対して、アメリカや中国本土のように観光ビザの最長滞在期間に制限があり、かつ、近隣の国との複数回の出入国が制度的にも地理的にも安易でない国や地域の場合であると、定期的に日本に帰国する必要が生じる。特に、アメリカの場合、国境を面しているカナダやメキシコへの渡航はアメリカ国内での滞在の一部として扱われてしまうため、観光ビザのリセットを隣国での滞在ではすることが制度上でできない。また、観光ビザでの滞在中は、住居探しや制限されたり、現地の医療保険に加入できなかったり、長期的な滞在中に不自由が伴うことになる。特に、アメリカにおいては、医療費が高額であることは長期フィールドワークを行う際には悩ましい問題である。出国前に日本で長期用の海外旅行保険などに加入する場合でも、医療費が無制限のタイプの加入となるとかなりの出費を覚悟しなければいけない。

そこで、一般的な長期フィールドワークを行う際の方法のひとつとなるのが、調査地にある大学に所属を持つことである。この場合、現地の大学に院生として所属するか、または、可能な場合は研究所などに客員研究員として所属することになる。ちなみに、留学といってもその方法はいくつかあるが、正規に現地の大学院生として所属する場合と、日本で所属する大学院が有する協定校に交換留学生として所属する場合とがある。留学として海外に渡航する場合、日本を含めた各国の政府や民間の各種奨学金制度に申請することができるため、長期フィールドワークの資金的な可能性の幅が広がる。研究助成制度については、博士課程に所属している院生の場合は日本学術振興会の特別研究員をはじめとして各種財団による研究助成制度にも申請できるのではあるが、競争率が高い場合もあるし、また、学部生や修士課程の院生の場合は申請できる助成金の選択肢が限定されている。そのような中で留学のための奨学金は、長期フィールドワークのための選択肢になりえる。また、交換留学の枠組みを使うと、日本の所属大学院が提供している奨学金への申請の可能性も出てくる。つまり、留学の制度は、長期フィールドワークのための選択肢として活用できるのである。

また、アメリカの場合、資金的な可能性に加え、学生ビザを有することができることにより連続で90日間以上の滞在が可能になること、現地の学生医療保険に加入することができること、観光ビザと比較して住居探しに必要な信頼性が高くなること、そして、授業の課題等を通じて現地調査をする可能性が広がることなど、観光ビザでのフィールドワークでは得られない多くの利

点を得ることができる。

Ⅲ. ハワイの大学院：「フィールド」それとも「ホーム」？

しかし、同時に学生ビザを所持し現地の大学院に所属することには一定の制限も伴うことになる。まず、何より、アメリカなどの大学では学費が高く設定されているため、何かしらのかたちで授業料免除や減免を受ける必要がある。そして、そのような援助を受けるには、設定されている学期ごとの最低限の単位を履修することが必要になる。これは、大学生・大学院生のカテゴリーをフルタイムとパートタイムに区分しているアメリカの大学制度においては、奨学金や授業料免除を受けるにはフルタイムの学生や院生である必要があり、それには一般的に学期ごとの最低単位（学部は12単位、大学院は8単位）を履修する必要がある。このことは、大学院での学位取得を目指す正規生でも、日本に帰国することが決まっている交換留学生でも、授業料免除を受けている限り同じルールが適応される。そのため、学期中は現地の大学院の課題に追われることになるのである。

私の身近な日本人の大学院生は、課題の多さから予定通りにフィールドワークが進まないことにストレスをためている人がいたり、はたまた、フィールドワークを基軸にして現地の大学院での制度上の最低限の要件のみをこなす人がいたり、それぞれに置かれた立場でどのようにアメリカでの時間を過ごすのかを日々模索していた。また、フィールドワークよりも現地の大学院での授業に追われる院生の中には、学術的な所属の主軸が日本からアメリカに移ってしまう人も多かった。私は後者であり、連日の課題に忙殺されるなかで、軸足がハワイに移っていった。結局、休学していた筑波大学も途中で退学することになり、ハワイを基軸とした大学院生活に腰を据えることになった。この時の経験が、実際のところ私の現在の教育・研究業務での一番の土台になっているのではあるが、このことはある意味「現地で壁にぶつかり」ながら、フィールドワークとは違う方向に自分が向かってしまった結果であった、と振り返ることもできる。

もともとは、ハワイにおける先住民や日系人をはじめとした現地の人々が直面している社会問題に関心があり、そのことからハワイに行くことになったのが渡航のきっかけであった。同様の関心をもって日本からハワイに渡り、大学院に所属しながら調査をする日本人の院生も、研究所に所属しながら調査に集中する日本人の院生も身近にいた。悩みながらも積極的にフィールドワークをしながら日本の大学院に戻っていく院生と会話をしては、彼らの努力にとっても感心した。それに対して、私の場合は、現地の大学院での課題にはまっぴら、ある意味、抜けられなくなってしまっていた。アメリカにおける人類学は分野としての領域の幅が日本の人類学とは異なっている。特に私が学んでいた当時のハワイ大学においては、アメリカの人類学でも「4分野人類学」と呼ばれる枠組みを重視し、文化人類学、言語人類学、自然人類学、考古学の基礎を学ぶことが求められた。かたや文化・言語人類学の課題の一部として法律という書きことばと私たちの日常生活との関係を学ぶ一方で、自然人類学と考古学の授業で発掘された人骨の歯や道具から環境と文化の関係の議論をさせられるという、両極端な文系と理系の世界に身を置くことに

なった。そして、日本では文系と理系にそれぞれが独立した4分野の全てを最低限でも学部の基礎科目の授業担当ができるようなレベルになるまで習得することが求められた。しかし、私はこの環境にはまってしまい、夜遅くまで課題に取り組み、授業中にはディスカッションの流れに注意しながら自分の考えを論じることが求められる日々を楽しむようになり、日本の大学にいた時に考えていたフィールドワークをほったらかしにするようになっていた（むしろ、時間をほんの少しでも見つけたらまったく違うことをして息抜きをしていた）。ある意味、ミイラ取りがミイラになってしまったようなものであった。

IV. 調査上の「フォーマル」と「インフォーマル」のはざままで

また、業務や日常生活を通じて、もともと自分の研究関心だった地域にどっぷりつかる機会も得ることができた。しかし、私の場合は、その経験をフィールドワークとして研究に直接結び付けることができなかった。むしろ、結び付けることを躊躇した。

私自身のハワイでの生活は、人間関係においてとても恵まれていた。低所得者や先住ハワイ系住民、そして、オセアニア系住民が多い地域にあるコミュニティ・カレッジで教鞭に立つことができたり、スポーツや日常生活を通じて多様な人たちと交友関係を築くことができた。幸いにも、その交友関係は現在でも続いているが、この交友関係はフィールドワークという研究を第1の目的としたものではなかった。ここで問題なのは、損得なしの交友関係を最初に築いてしまったため、その関係を、ある意味、自分自身にとって損得関係が絡むフィールドワークのデータに変換することはできなかった。

長期フィールドワークは、ある意味、「研究調査のための協力を得る」という損得関係の存在を調査者自身が把握することから始まり、フィールドにおいては交友関係と研究上の損得関係とのバランス感覚に注意を払うことがとても大切になる。しかし、このバランス感覚は、学生や院生、そして、研究者を含めた「それぞれの調査者がどのようにしてフィールドに入っていくか」というそれぞれの立ち位置によって全くアングルが異なってくるといい。フィールドワークの場合、「調査」という目的を前面に出すことで現地での人間関係を築いていくのが一般的といえる。まず、研究・調査の基軸となる人間関係には「情報の収集」や「資料の収集」といった回避することができない損得関係が基礎としてあり、そして個々人によっては、もともとは調査を目的とはしていないスポーツや音楽をはじめとした趣味や特技を介した交友関係も同時に築く。実際のところ、人類学的なフィールドワークにおいては、このような「調査を基礎とした人間関係」と「本来は調査の主眼ではなかった交友関係」とは密接にかかわることが多い。どうしても「調査」のための人間関係においては、インタビューを含めた調査の場において、事前調査で得られる情報を基礎としたやり取りになりがちで、そしてそのやり取りもフォーマルになりやすく、堅苦しくなってしまうことがある。文献やオンラインデータベースなどを基礎とした事前調査は、同時に調査者自身の関心や視野を制限することになる。そのことから、フィールドで適切な協力者を得られないと調査者自身もともと有している視野・視点と現地の人たちとの感

覚や認識の間にずれがあることに気づくことが難しくなる。一般的な事前調査では、フィールドで生活する人々の視点から違和感なくコメントを引き出せるような適切なインタビュー感覚を養うことは安易ではないし、まして、かきこまったフォーマルな状況でのインタビュー調査を正確に、そして、効果的に行うにはかなりのフィールドでの経験が必要になってくる。フィールドに入ったばかり、もしくは、学部生や大学院生をはじめとしたフィールドワークの経験の浅い調査者が、慣れない土地で、かつ、フォーマルな設定の中でこのようなスキルを瞬時に習得できるであろうか？ 答えとしては、その可能性はとても低いのではないかと思われる。

それに対して、趣味などのインフォーマルな交友関係においては現地の人たちとともに行動をしたり、時間を共有することを通じて、現地の人たちの視野・視点、そして、感覚や認識を得られることがある。作業や運動中、または、休憩や息抜きの時間における何気ない会話から、現地社会における重要な視点やデリケートな事項といった側面が見えてくることもある。そのような情報から、具体的にどのように質問すれば現地の人たちの意見や視点をより詳細に引き出すことができるかがわかったり、フィールドに入る前には想定をしていなかったことが実際には自分自身の研究関心にとって重要であったことがわかったり、または、事前調査に基づいた問題意識を完全に再構成する必要があることがわかったりする。そのため、フィールドでのインフォーマルな場は、「調査」という損得関係が前面に出てしまうフォーマルの場における調査者自身の不足している部分を補完してくれる重要な基盤であるといっている（例：原尻 2008：90-92）。

しかし、この調査上における「インフォーマル」な関係の場で得られた知識や情報は、あくまで、フィールドワークをしている本人の中にとどめることが基本であり、他言したり、直接的に引用するには細心の注意が必要となる。なぜならば、それらの知識や情報は調査を前提とした環境で得られたものではないのであり、情報提供者も調査者を信頼して話してくれているからである。つまり、調査上の損得関係がないことから、より気軽に情報提供してくれていることもあり、そのことから、情報提供者への十二分な配慮なしに得られた知識や情報を研究に利用することは、その情報提供者の個人情報の特定の可能性にもつながりかねず、調査者としての研究倫理からも逸脱するからである。

または逆に、フィールドにおける地元の間人関係の中で情報提供者と敵対関係にある人物がおり、外部から来た調査者に対して自らの視点の情報を意図的に流すことにより敵対者を貶めようとする場合も否定できない。実際に、筆者のハワイ当時の指導教官が大学院生時代にフィジーでフィールドワークを行った際、別の集落でフィールドワークをしていた彼の友人が現地の人々同士の敵対関係に気づかないうちに巻き込まれ、調査の継続ができなくなってしまったことがあった。具体的には、ある住民から対立する特定個人に関するネガティブな情報を提供されたのではあるが、正義感が強かった彼は、その情報をもとに、怒鳴り込みをしてしまい、收拾がつかなくなってしまった。そのことを、深刻にとらえた集落の住民は、最終的に彼に対してフィールドワークを中止し集落から離れるように要請したのであった。

V. 「ホーム」となったハワイ：業務・研究上の倫理

ここで私のハワイでの話に戻してみよう。私は、ハワイへは正規の大学院生として渡航したため、資金的な不安はかなり軽減されていたのではあったが、授業などの課題に追われ、機軸が日本の大学院から現地の大学院にシフトしていた。そのような中で、現地の大学院内外で徐々に交友関係が広がっていったのではあるが、それは同時に、現地の規則やルールに縛られることも意味していた。先述したハワイ大の大学院生として身分を継続するための最低履修単位の登録をはじめとして、ハワイ大での学則・研究倫理制度等の適切な把握と順守（例：Bestor, Stainhoff, and Bestor eds 2003 : 13-17）、そして、大学外で関わる組織や対人関係上の規則や規範などを適切に理解し行動に活かすことが求められた。つまり、日々の課題や業務をこなしながら、同時に、多くの規則や規範を学ばなければいけない中では、もともとの基盤であった日本の大学院に戻ることを念頭に置いた調査・研究との調整をすることは簡単なことではなく、結果的に、積極的に調整していくことを断念してしまった。



写真1：ハワイのコミュニティ・カレッジで教鞭をとっていた際に出版のために学生に使用許可をもらえた写真のひとつ。海軍基地であるパール・ハーバーに面するキャンパスで、多様な世代とエスニシティとをもつ学生たち（筆者撮影）

人類学における論文や出版といった研究報告においては、先述した個人情報をはじめとしたデリケートな情報の保護をはじめとして長期フィールドワークで得られた知識や情報の大半を論文として記せないことがある。このことは皮肉にも、調査を目的としなくなった私のハワイで得られたさまざまなことにも当てはまった。そのうちの例のひとつが、私がハワイのコミュニティ・カレッジで学部生に対して教鞭をとるようになったことであった。私はオアフ島内にある3か所のコミュニティ・カレッジで講師として勤務するようになり、当時住んでいたハワイ大学内にある研究所の宿舎から、地域特性が全く異なる島の北東部と中部、そして、西部にあるキャンパスへと毎日車で通勤していた。勤務内外の時間においてそれぞれの地域の状況を地理的・視覚的に学べたことももちろんであったが、教鞭をとりながら非常に多様な学生たちと交流することができたのは、研究上の「フィールドワーク」を主な目標にしていなかったからである。具体的には、先住ハワイ系をはじめとして、サモア系や日系、フィリピン系、中華系、そして、欧米系といったエスニシティの多様性をはじめとして、学期の途中に配属変更の通知が突然おりて遠隔で課題

をこなす必要がでたりする現役の軍人の学生たち。任務を終えてカレッジに復帰してきた退役軍人の学生たち。義務教育を飛び級して来た18歳未満の学生。義務教育期間中にドロップアウトをしてしまいやり直しのために卒業を目指す学生。子育てと仕事と授業を掛け持ちしながら走り回っているシングルマザーの学生。キャリアアップのために仕事をしながら卒業を目指す学生。そして、刑事罰を受けた後に社会復帰の選択肢として卒業を目指す学生など、授業中、そして、休憩時間中を含めた学生とやり取りからハワイの社会の多様さや複雑さに触れるかけがえのない機会を得ることができた。そこで接した学生たちを鏡として見えたハワイのそれぞれの地域は、各種の統計や論文、そして、著書に記されたものよりもより生きた現実であった。彼らとの業務や交流があったからこそ、統計や論文の背景や論文執筆者の意図をより一層理解しようとする批判的思考が私の中に養われたと思っている。しかし、学生たちとの授業での経験をそのまま私自身の研究に流用することはできなかつたし、今でも、それはすることはできない。なぜならば、私は彼らとの関係は、業務上の「教員と学生」としての関係が基礎となっており、その関係は組織としての規則だけでなく、不均等な力関係（学生の成績の判断をする教員という立場）も下地となっていた。そのため、教鞭という業務を介して得られた情報を直接的に研究に使うことは制度上も教育倫理上もできなかつた。現地での業務から、私自身、いろいろなことを学び、吸収していったのではあるが、それらの業務や人間関係の土台となっている規則や倫理が優先された。また、その当時は生活の基盤がハワイに移ってしまっていたこともあり、日々得られた知識や情報を研究や教育などといったかたちでつなげていくかということ、ある意味「一歩下がって考える」ことよりも、その生活の中で直にいかにか還元していくか、ということに焦点を当てていた。

VI. 単純でない「一歩下がって考える」という行為

人類学的なフィールドワークにおいては、調査を前面に押し出したフォーマルな対人関係と、調査外のインフォーマルな対人関係とが絡み合うことで、可能な限り現地の人々の視点に近い位置からフィールドを眺め、そして、分析できるようになることが特色として挙げられるのではあるが、それと同時に、フィールドから「一歩下がって考える」ことも求められる。この「一歩下がって考える」とは、研究指導においては比較的耳にすることが多いフレーズでもあるが、実際のところ、「一歩下がって考える」という行為は、フィールドで「現地の人々の視点」を得ることと同じぐらい、もしくは、それ以上に単純なことではない。

アメリカ人類学会の会長であったポール・ボハナン (Paul Bohannan) は、この「一歩下がる」ということを「聴衆の視点に立つ」ことであると論じ、このことが人類学的な研究の難しい点であることを指摘している (Bohannan 1969)。フィールドワークにおいて調査者は現地の人々の視点を学ぶことが求められるのであるが、フィールドで学んできたことを他者に説明する際には、「聴衆となる他者」が理解できるように説明の仕方を常に検討・分析する必要もある (Gluckman 1969)。そのため、人類学者はフィールドだけでなく、自身が所属する学術上や業務上のコミュ

ニティの特性も十分に理解し、その2つの社会を比較分析しながら、可能な限り誤解を生じさせることなく、そして、効果的に2つの社会を結び付けることが求められるのである。つまり、調査者は必然的に、フィールドで生活している「他者」と調査・研究の聞き手である「他者」との間に位置していることになる。その意味で「一步下がる」という表現は、ある意味、調査者自身が置かれている状況をその背後にいる「聴衆」の位置から鳥瞰図的に振り返るようなイメージを連想させる。つまり、学術研究という環境において「一步下がる」という言葉の意味は、むしろ、調査者によるフィールドワークに基づいた研究・分析の発表を聞く「聴衆の視点に立つ」ことを意味している。

そのため、日本の学部・大学院や研究教育機関に所属している場合のような比較的聴衆を想定しやすい場合は、このことは「常識」としてとらえられてしまうこともある。むしろ、人類学や比較研究において「他者を知ることを通じて自分のことを知る」というように語られることがあるように、海外を「フィールド」として調査・研究を行っている場合は「海外が他者、日本が自分自身」もしくは「海外がフィールド、日本が聴衆」というように図式化されてしまうことがある。特に、学部生・大学院生の場合は、所属する学部・大学院の指導教官や論文審査教員、そして、同輩の学部生や大学院生などが「聴衆」になり、また、所属学部・大学院のカリキュラムやゼミなどで習得する内容がフィールドから「一步下がる」ためのフレームワークと一般的にはとらえられているかもしれない。私自身、ハワイに行く前に受けた指導では「フィールドから一步下がって考える」という助言が比較のカジュアルに行われ、ある意味無批判的に「日本にいる聴衆」、もしくは、「各学術分野における日本の代表的な研究雑誌編集にかかわる人々」という指導を受けてきた。

しかし、1960年代のボハナンなどの人類学者たちの議論をはじめとし、その後続く人類学的な「フィールドと聴衆」の関係の議論においては、実際には調査者をフィールドから「自文化」にいる「聴衆」の視点に「一步下がらせる」だけでなく、むしろ、調査者を「フィールド」と「聴衆」という2つの「他者」に横たわるスペクトラムに位置することを認識させ、そのスペクトラム上において2者間を結び付けることを戦略的に行う「翻訳者」とであると論じられている(Brenneis 2004)。そして、「聴衆」は「自文化」や調査者が属する本国の「学術組織」に限定されるのではなく、様々な人々が「聴衆」になることを前提にして議論を発展させてきた。具体的には「調査者が研究者としてのキャリアの基礎をおく言語圏の研究者」という一般的に連想される「ホーム」にいる人々をはじめとして、「聴衆」は研究者以外の人々やフィールドで生活する現地の人々をふくめ幅広くとらえられている。そして、研究報告をする際に用いる言語も聴衆に合わせる必要があり、日本語のみならず、フィールドでの共通語や公用語、そして、各研究分野での専門用語から一般聴衆向けの解説的な言い回しまでこちらも幅広いのである。そのため、多言語をあやつることができたり、複数の学術領域を専門としていたり、学術と実務などの複数の業務に従事していたり、はたまた、フィールドでの生活が長くなってしまったりした場合などは、「一步下がる」時のスペクトラムは、必然的に非常に広くなり、時にはどこに、そして、何歩下がっていいのかわからなくなってしまうことがある(例: Jacobs-Huey 2002; Narayan 1993;

Tengan 2008など)。また、研究職を目指している大学院生にとっては、現実的な問題として大学等での就職市場での状況も念頭に入れて研究発表のまとめ方や論文の書き方を調整する必要もあり、そうなると、フィールドで協力してくれた人たちのために研究をしているのか、もしくは、当初自分自身の目的としていた研究ができているのか、はたまた、大学や学術界からの評価ばかりを気にするようになり自分の立ち位置がわからなくなってきてしまうようなこともあるかもしれないのである。

VII. 「フィールド」と「聴衆」というスペクトラムの上で

「フィールド」と「聴衆」というスペクトラムは、人によっては字義通りに「一步の間隔」に感じられるかもしれないし、別の人によっては幅が広く感じられるかもしれない。実際のところはいずれの場合でも、「フィールド」と「聴衆」を結び付けることが調査・研究であり、このスペクトラムこそが調査者が最も主体的に物事を分析し、そして、判断をすることができる領域でもある。フィールドで得た知識や情報をもとに、様々な学術領域に貢献することもできるし、教育機関での授業や学生指導を通じて社会還元をすることもできるかもしれない。フィールドにいる人々に求められていることを考え、そして、自分がどのようにフィールドに貢献できるのかを考えて実行にうつすこともできるかもしれない。フィールドと実務とを橋渡しすることができるかもしれない。ある意味可能性ばかりではあるのであるが、同時にフィールドに長くいればいるほど、自分自身の知識のなさや限界を毎日痛感するようになり、路頭に迷うような感覚になるかもしれない。

ちなみに私は、ハワイにいた時に自分の知識不足を身に染みるほど感じるなかで、基盤もハワイに移ったことから「フィールド」と「聴衆」の境目もわからなくなっていた。博士論文のための調査地もハワイから日本になり、五島にかかわるようになり、しかし、日本で学会活動も続けていたため、スペクトラムは広がるものの、自分の立ち位置がさらにわからなくなっていた。

そのような中で、このスペクトラムの上にいることの楽しさを教えてくれた人たちがいた。まずは、ハワイ大学当時の指導教員で、彼は人類学者でもあり法学者でもった法人類学者で、同時に、文化人類学者でも言語人類学者でもあった。彼は、それぞれの専門分野の聴衆に合わせて理論やフレームワークといった研究発表の方法を常に変えていた。時には、聴衆を間違えてしまい「なんだ、こんな人類学じゃない」といわれてしまい、愚痴をこぼしていたこともあったが、その愚痴が私の心のおもりから解放してくれた。そして、彼は、人類学と法学を2重専攻する法人類学者たちと私との橋渡しをしてくれたとともに、そこから、私自身、同じような経験をしている他大学の院生ともつながっていくことができた。彼らとの交流が自分自身のいるスペクトラムが先の見えない森林なのではなく、むしろ幅広い可能性であることを認識させてくれた。



写真2：国際地域研究専攻の留学生を対象としたフィールドトリップを五島で実施した際に協力をしてくれた五島ひだまり法律事務所の古坂良文弁護士と院生たち（筆者撮影）

そして、同時に海外フィールドに携わる研究者のスペクトラムの広さを教えてくれたのが、常に日本から助言と情報を送ってくれていた、筑波大学の旧地域研究研究科でお世話になった教員であった。私がハワイで院生を始めた2003年は、日本では国立大学の独立行政法人化の初年度であった。その後、コンスタントに変化していく日本の大学運営の状況の中教審をはじめとした文科行政の動向までも含めて私がお知らせできるようにかみ砕いて情報提供してくれた。そして、そのような中で、日本の大学教育予算の動向においても国際交流・教育の分野の予算に変化が出ており、日本に帰国し就職を念頭に入れる場合は、人類学での募集だけでなく、国際交流・教育の分野を含めた募集も念頭に入れること、つまり、「聴衆」のスペクトラムを戦略的に広げることが助言してくれた。そして、気が付けば、日本にいたるときも、アメリカにいたるときも、国際交流・教育が学位取得時よりこれまでの自分自身のキャリアの主軸になっている。

自分がスペクトラムの上にいると捉えられるようになったことにより、私にとっては「フィールド」と「聴衆」が連動するものとなり、ハワイも五島も、そして、アメリカ本土やカナダの一部も「フィールド」であると同時に「ホーム」でもあるようになっている。例えば、五島で調査をさせてもらうだけでなく、文化財や景観関係の委員として地域に調査・研究を還元したり、一緒にスポーツをしたり、学生・院生の研修を受け入れてもらったり、五島は私にとってはフィールドでもありホームでもある。アメリカや中国などではホームである自分の出身校や以前の勤務校に日本からの海外研修の学生を受け入れてもらったりもしている。そして、最初は「調査」を基盤としたスペクトラムが、学生とのやり取りや研究者交流といった国際教育・交流を内包することでより幅が広がっているのをとみに感じている。そのことにより、最初に自分自身が基軸としていた日本の文化人類学や地理学とはかなり違った立ち位置におかれるようになり、そして、研究者というアイデンティティはいまいちというある意味異星人のようになってしまっている感じも否定はできない。しかし、それが、フィールドを通じて得られた自分自身の個性であると思っている。

日本の外での生活が長かったり、日本の中でも多文化的な環境で育ったり、多言語の環境で育ったような背景がある学生や院生の場合、自分自身が念頭に考えている「聴衆」と、指導教官や所属する学部や研究科などで共通認識としてとらえられている「聴衆」にずれがある場合があるかもしれない。しかし、そのように感じた時は、自分の「フィールド」と「聴衆」の間にあるスペクトラムの中でどの要素を使うと所属組織の「聴衆」となる人たちと「フィールド」を結び

付けることができるのか、という風にとらえられると、少しは効果的な戦略を立てられるかもしれない。うまくいかない時もあるかもしれないが、その時はネガティブにとらえなくてもいい。なぜならば、多くの研究者たちも、このスペクトラムの上で右往左往しているのである（はず）だから。

参考文献

- Bestor, Theodore C., Patricia G. Steinhoff, and Victoria Lyon Bestor eds. 2003 *Doing Fieldwork in Japan*, Honolulu, University of Hawaii Press.
- Bohannon, Paul 1969 "Ethnography and Comparison in Legal Anthropology" in L. Nader, (ed.), *Law in Culture and Society*, Berkeley, University of California Press, pp. 401-418.
- Brenneis, Donald Lawrence 2004 "A Partial View of Contemporary Anthropology", *American Anthropologist* 106(3), pp. 580-588.
- Gluckman, Max 1969 "Concepts in the Comparative Study of Tribal Law" in L. Nader, (ed.), *Law in Culture and Society*, Berkeley, University of California Press, pp. 349-374.
- Jacobs-Huey, Lanita 2002 "The Natives Are Gazing and Talking Back: Reviewing the Problematics of Positionality, Voice, and Accountability among "Native" Anthropologists", *American Anthropologist*, 104(3), pp. 791-804.
- Narayan, Kirin 1993 "How Native Is a "Native" Anthropologist?", *American Anthropologist*, 95(3), pp. 671-686.
- Tengan, Ty P. Kāwika 2008 *Native Men Remade: Gender and Nation in Contemporary Hawai'i*. Durham, Duke University Press.
- 原尻英樹 2008『文化人類学の方法と歴史』新幹社